
平成20年度全国大学 I T活用教育方法研究発表会を聴講して

小林 潔

2008年7月5日(土)に私学会館(アルカディア市ヶ谷)で開催された標記の研究発表会に参加・聴講する機会を得た。本研究発表会は社団法人私立大学情報教育協会(私情協)が1993年から主催しているもので、本学も私情協の正会員である。今回の研究発表会の参加者は、122大学、12短大、5賛助会社で計227名であった。参加費は9500円、筆者は科研費から支弁をうけた〔基盤研究(C) 20520530「非専攻課程のための新しいロシア語習得基準とその教育内容に関する総合的研究」(研究代表者外国語学部堤正典/研究分担者小林潔) 2008年度~2010年度(日本学術振興会)〕。堤教授と筆者は言語研究センターの08年度共同研究としても「ロシア語習得基準の研究 新しいロシア語習得基準策定のための諸問題の検討」を進めており、今回の聴講もその活動の一環をなす。

当日の諸報告は、語学系、医師薬系、理学系、情報専門系の4分野に分かれて行われ、筆者は語

学系の以下の6報告および合同特別セミナー「教育効果を高めるための授業方法」を聴講した。

川島浩平(武蔵大学)「地域研究講義における語学学習と概説授業の統合」(英語動画ニュースを用いた地域研究と英語学習とのリンクの試み)；

木内徹・福島昇(日本大学)「学生のやる気と集中力を高める英語教育のI T化」(学生の集中力を考慮し3部構成授業、スクリーンへの教材投影とマークシートを用いた問題演習を実施)；

鈴木靖(法政大学)「授業同期型eラーニングによる自宅学習について」(教員に特別なIT技術を要求せず、宿題提出期限の曜日と時刻、宿題範囲の設定のみ求めるシステム)；

水野邦太郎(慶應義塾大学)「Interactive Writing Communityにおける学びの共同体創りとライティング能力の育成」(学習用ウェブサイト構築で、ライティング教育の4問題一題材、目的、対象、ニーズを解決する)；

